

**\* 塔望遠鏡ドームの雨漏り終了、ただ今の住民は「たぬき」**

アーカイブ室新聞 262号に「登録有形文化財の太陽塔望遠鏡のドーム修理始まる」という記事を書いた。塔望遠鏡の建物は大正15年(1926年)に完成している。今年は2010年、実に84年の年月を経ている。昭和43年(1968年)1月に塔望遠鏡の更新機である太陽クーデ65cm反射望遠鏡が岡山天体物理観測所に完成して、塔望遠鏡はその役目を終え長い眠りについてた。ただでさえドームは雨漏りがしやすい屋根である。建物も人が手を入れなくなると痛みが急速に進む。ここ十数年は雨漏りがひどく地下の焦点部まで水が溜まるようになっていた。そこでキャンパス委員会を通じて施設課にドーム補修を依頼し、2010年1月末ドーム補修工事が終了した。見違えるようになったドームが写真1である。



写真1 金ぴかに輝く補修された塔望遠鏡ドーム

写真1で見ると、緑青で覆われた貫禄のあるドームは、建替えられた神社の屋根のように真新しい銅板で葺きかえられ、ピカピカに輝いている。銅板葺き替え工事のため、下地の板類も全て交換された。困難を極めたのはドームの鉄骨の鉄製のアンクル材に沿ってヒノキの垂木材に相当する曲線の部材を製作することだったようだ。写真2は曲がった

部材を作った残りの木片である。



写真2 ドームのカーブに沿った部材を作った残りの木片

写真3は、すっかりきれいになったドーム内側のヒノキの板材の様子とシーロスタットである。雨漏りがひどい間はシートに包まれていたシーロスタットが姿を現した。



写真3 ヒノキの香るドーム内側とシーロスタット

塔望遠鏡の建物内部はひどい荒れようであったが、この雨漏り補修工事を機に内部の床掃除を行い、たぬきに気球望遠鏡の「浮き」に使う発泡スチロールが食い散らかされ、荒果てた様子だった床は、一応ゴミはなくなった。また、長い年月たぬきの棲家と化していた建物内部は餌の木の実のカス、食べ残しの木の实（銀杏、どんぐりなど）、糞尿にまみれていたダンボール類で大変な光景であったが、それらの汚物はなくなった。しかし長年、電気を止められた半地下室の分光器室は湿気がひどく、この建物を有効に使うにはまだまだ程遠い状態である。

この建物の住民であった「たぬき」君はご健在である。分光器室の東西の壁には外に向かって下った直径 40cm ばかり、奥行きが 3~4m と思われるコンクリート管に繋がった穴がある。その穴を懐中電灯で照らすとなんときらりと光る 2 つの目玉が見えた（写真 4）。



写真 4 きらりと光るたぬきの目玉



写真 5 穴の中のたぬき

写真 5 は、確かに狸であることを確認した写真である。以前、穴の中を見た際、すぐに

そっぽを向かれ、そのときはハクビシンと思ったのだが、今回は確実にたぬきと確認できた。写真6は、そっぽを向かれ、足だけはっきりと写った写真である。



写真6 足だけが写った動物の写真

天文情報センターでは、この塔望遠鏡の建物の有効利用を考えている。何しろ分光器室だけでも幅7m、奥行き20mの大きな空間がある。乞う、ご期待！

今回は、ドーム補修終了の報告と、「たぬき」との出会いの報告にとどめた。